# 「なよたけの碑と女性たち」

善龍寺
「なよたけの碑」
題字は飯沼貞雄(貞吉)
年齢は数え

なよたけの　風にまかする
身ながらも　たまわぬ節の
ありとこそきけ　西郷千重子

会津武家屋敷

善龍寺　西郷頼母墓

奈与竹（なよたけ）の碑は、寛永（かんえい）二十年（一六四三）保科正之（ほしなまさゆき）公とともに山形から移った曹洞宗祥雲山（ずいうんざん）善龍寺（ぜんりゅうじ）境内にあります。山門は戊辰戦争でも焼かれず当時のままで、二階に西国三十三観音像が安置されています。

石碑の名前は、北出丸前の本一ノ丁（ほんいちのちょう）に位置した保科家の分家にあたる西郷頼母（さいごうたのも）（千七百石・一石は米百五十キログラム）邸で妻千重子（ちえこ、34歳）が自刃した際、辞世の句からとったもの。碑文は、飯盛山で自刃したが生き残った千重子の甥、「飯沼貞吉（さだきち）」が書きました。

碑文の意味は「女（め）竹（細竹）は、風に任せているように見えるが、折れないための節があることを組み取ってほしい」という意味。石碑の裏側には、戊辰戦争で亡くなった会津藩の婦女子二三三名の名が刻まれています。石碑は、昭和三年に建立。

慶応（けいおう）四年（一八六八）八月二十三日（現在の十月八日）西軍は戸ノ口原で白虎隊らを破り、土佐藩の板垣退助を先頭に若松城下に進攻、朝の九時頃でした。城下では、戦いの足でまといにならないようにと自刃（じじん）した婦女子が多くいました。西郷頼母邸では、千重子（飯沼家より嫁ぐ）の長女ら五人をはじめ、一族二十一人が城に入らず屋敷で自刃。千重子の母の律子（りつこ、58歳）妹の眉壽子（みすこ、26歳）妹由布子（ゆうこ、23歳）長女細布子（たいこ、16歳）二女瀑布子（たきこ、13歳）は辞世の歌を残し自刃。子の田鶴子（たづこ、9歳）常盤子（とわこ、4歳）季子（すえこ、2歳）を千恵子は短刀で刺し、母と妹らは互いに刀を刺して亡くなります。また、支族の西郷鉄之助夫妻、母の実家小森家の祖母や婦女子、親戚で江戸藩邸から避難していた親戚ら二十一人が亡くなりました。

『西郷隆盛一代記』に、薩摩藩士（かつては土佐藩士といわれていた）の川島信行（のぶゆき）が、西郷邸の玄関より入り、書院とおぼしき所を通り、奥の部屋に進むと、男女が丸くなり還座（かんざ・まるくすわる）で自殺していたという。細布子（たいこ）はわずかに息があり、

「その所に参らるは、敵か味方か」

と尋ね、敵ならば、戦おうとするしぐさをしたため、川島が

「味方だ、味方だ」

と叫んだ。細布子は、その場に倒れ、懐剣（かいけん）を出し、咽喉を刺そうとするが出来ず、川島が不びんに思い介錯（かいしゃく）したという。そして、辞世の短冊を持ち帰ったのです。

東山の会津武家屋敷に自刃の場が再現されています。

なお、西郷頼母は、明治三十六年、生家の西郷邸に近い市内東栄町の香寿庵裏の十軒長屋で亡くなり、善龍寺に墓が建てられました。


図・写真・文　©石田明夫2018　問合せ　Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索。